

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 芥川龍之介「鼻」に関する予備的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-22 キーワード (Ja): 普賢, 救済, 前世功德, 犬, 九輪 キーワード (En): 作成者: 舘, 健一, Tachi, Kenichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000731">https://doi.org/10.57529/0002000731</a>

## 芥川龍之介「鼻」に関する予備的考察

館 健一

## はじめに

第四次『新思潮』創刊号に付された「編集後に」(大5)と  
いう文章があるが、これは同書に収められた小説「鼻」につい  
て書かれたものである。その中で芥川は「僕はこれからも今月  
のと同じやうな材料を使つて創作するつもりである。あれを単  
なる歴史小説の仲間入をさせられてはたまらない。勿論今の  
大したものとは思はないが。其の中にもう少しどうにか出来  
るだらう。」といい、以後実際に「地獄変」(大7)などの古典

に取材した作品が発表されていくこととなる。また、別のところでは「当時書いた小説は、『羅生門』と『鼻』の二つだった。(略)なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書き  
たかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、  
この二つの短編を書いた。」(あの頃の自分の事」大7)とも  
記しており、この頃すでに自らの歴史小説の方法について自覚  
的であったことが知れる。小説の読解にあたっては『今昔物語』  
の中でも主に「池尾禪珍内供鼻語第二十」<sup>1)</sup>との関連を探る論究  
が試みられ、後に内供の人物造形に近代的自我を見出す方向で  
発展しながら数々の業績を挙げてきたことは衆目の一致すると

ころだろう。そのこと自体には疑いを入れないが、作品の解釈をめぐっては論者によって大きな隔たりがあり、その前提となる幾つかの事項について改めて検討を加える必要があると私は考えている。

結論からいえば、法華経や普賢菩薩、犬に関する記述は『今昔物語』の中でも『法華験記』出典の逸話の類型を辿っており、そこに前世功德や救済のモチーフを看取できる。その意味においては、従来指摘されてきた「羅生門」や「芋粥」(大5)ばかりでなく、「蜘蛛の糸」(大7)や「白」(大12)をはじめとする作品群とも関係的であったろうか。鼻の短くなった内供がふさぎこんでしまう際に眺めた「普賢の画像」は『平家物語灌頂卷』と緊密に関係すること、そして物語末部における九輪の描写の伏線であることなどを物語っている。としたならば、末部の描写は超自然的な存在のあらわれ、すなわち救済の実在性を明らかにしているといえそうである。そもそも、「愛すべき内供」という人物像や物語末部の詠嘆をどのように捉えるかという問題を設定する時、翌朝以降の描写がどのような意味を持ち得るかを問わずに成立するとは思われない。そのため、物語に救いがあるか否かを考察する以前に、検討されるべき課題は未だ残されているように思われる。

「今昔物語鑑賞」(昭2)において芥川は「当時の人々の心に興味を感じてゐる」ことを明かし、中でも仏法の部については仏菩薩や天狗などの「超自然的存在を如何に如実に感じてゐたか」という点を強調していた。「鼻」や「芋粥」をめぐっては『今昔物語』を広げるたびに「当時の人々の泣き声や笑ひ声の立昇るのを感じ」、「彼らの軽蔑や憎悪の(例へば武士に対する公卿の軽蔑の)それ等の中に交つてゐるのを感じた。」とした箇所が度々引かれてきたけれども、むしろ「僕等には唯芸術的」であるものが当時の「彼等」には「幻の中にかう云う超自然的存在を目撃し、(略)恐怖や尊敬を感じてゐた」とした世界観こそ、「鼻」における顛末そのものではなかったか。本稿では以下こうした視点から論究することとし、本文引用は全て「芥川龍之介全集 第一卷」(岩波書店 昭52)によった。

### 一 先行研究について

物語は五六寸ばかりもある長鼻の高僧という型を踏襲し、それを苦に病む姿が描かれることで近代特有の問題性が提起されていく。内供はこの長い鼻によって損なわれる自尊心の回復を試み、弟子が「知己の医者」から聞いてきた方法によってつい

に鼻は短くなる。しかし、周囲からはかえって笑われたような気になり、「或夜」の明けた「翌朝」に鼻が長く戻ったことで「かなければ、もう誰も晒ふものはないにちがひない。」と思う、というのが大まかな筋である。

このような物語内容は様々に論じられてきたけれど、その評価は大きく分けて次の二つに集約することができる。その第一は、吉田精一に代表される批判的な読み方で、内供の自尊心と「傍観者の利己主義」を前景化させ、内供が笑われるようになった理由を「内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。」とする叙述に沿った見方をする立場である。吉田は「内供の気にかけているのは、彼自身の本質的な人間的価値とは無縁の、単なる外見、容貌の問題」であり、それを他人に知られまいとした態度が「嘲笑を買うにも十分の理由となる」と位置付けた。こうした視点は今日におけるまで最も有力な「鼻」論の一つである三好行雄「負け犬——『芋粥』の構造」<sup>3</sup>にも引き継がれ、物語末部の内供の心情は「明らかに錯覚である」として「今日からはまた、長くなつた鼻を内供は笑われねばならぬはずである。この錯覚に被害者としてのあわれがあり、不思議なペースがにじむ」と論断されている。これに「内供の、いかに滑稽で哀れなさまをえがきだしてゆく」<sup>4</sup>作品であるとす

る駒尺喜美、「禅珍内供の不幸は（略）対世間意識だけによつて生きる生き方に原因するものである」<sup>5</sup>とする鳥居邦朗が続くなど、はたして内供は自己を客観視し得ない滑稽な存在と捉えられてきたのだった。

第二は、平岡敏夫に代表される所謂「明るい、『鼻』の（読み）<sup>6</sup>」で、内供の描かれ方に人間の悲哀を見出し、これを肯定的に捉えていこうとする立場である。平岡は『芥川龍之介 抒情の美学』<sup>7</sup>の中で「高僧を平凡な人間にひきおろすところに芥川の諷刺の意図があつたというよりも、むしろ芥川はすべての人間にふつうの人間を見出したかった」と、それまでとは全く異なる観点から評価した。しばしば指摘のあるように、内供の鼻は長い状態に戻つたのだから、実際には再び周囲から笑われる生活が待っているのかもしれない。ただ、作品にはその部分は描かれずに閉じられており、そうした含み、あるいは突き放された距離にこそ小説としての「鼻」の生命が宿つているともいえる。そこに作者の「優しさ」を見出し、物語末部についても「これは『愛すべき内供』がつねに繰り返すべき祈りであり、だれもこの祈りを晒ふことはできない」とした点は、それまでの読みを大きく転換した卓見といえる。石割透はこの箇所について「内供が初めて自然な自己を獲得した平靜な精神の状態を

示すもので、作品当初の内供の状態に帰ったことを意味するのではない<sup>(8)</sup>と述べ、山崎甲一も『愛すべき内供』という呼び方は、作者が正しい意味で、彼を深く思い遣るところに発している<sup>(9)</sup>。」と、同様の見解を示している。

内供の「もう誰も晒ふものはないにちがひない。」という情感は「自尊心」と「傍観者の利己主義」とによって相対化されている、という文脈を想定すれば、批判的な読みは成立するかに見える。一方で、「翌朝」以降の描写を重視して、これが内供の将来を照らす道筋となると捉えれば、「(「明るい」「鼻」)の読み」もまた十分に根拠のあることだろう。そのため、両者の乖離は容易に決着のつくものとも思われないが、以下の二点を検討することでこの二極化する解釈の基盤を整備することにながってゆくものと考えている。一点目は前者の根拠として挙げられている部分で、内供の気にかけているのが「単なる外見、容姿の問題」なのかどうかという点。これは同時に、ふさぎこんだ後に見た「普賢の画像」をどのように定めるか、という視点に連なっていることだろう。二点目は後者の根拠として挙げられている部分で、翌朝以降の描写が一体どのような理由から内供の明るい未来を暗示する可能性が模索されるのかという点。具体的には、落葉で庭が黄金を敷いたように明るく「九輪がまば

ゆく光つてゐる」ことの象徴性を究明していくことである。

田中実のいうように、「庭内が明るいと語られている」と主人公の内面がどのように関わり、作品にどのような表現効果が齎されるのか、という点については「どういふ訳か、こうしたことには研究者の言及はきわめて少ない」。解釈の鍵となるような点を問わないまま多くの論が末部に集中し、しかも議論の基盤を持たないまま大きく二つに分かれている現状についてはやはり是正されてゆくべきだろう。ただ、作品全体の解釈をめぐっては語りのレベルをどのように定めるかによっても異なるため、ここでは扱えない。本稿では、そうした問題に對峙する前の予備的考察として論を進めていくこととしたい。

## 二 普賢菩薩について

「或年の秋」、京へ上った弟子の僧が「知己の医者」から聞いてきた方法を実践し、はたして内供の鼻は短くなる。ところが、そのことが原因なのかかえって周囲に笑われたような気になりに、ふさぎこんでしまうことになる。

愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍に

かけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。

普賢とは文殊とともに釈迦如来の脇侍として知られる菩薩で、梵名サマンタ・パドラは「普く賢い者」の意である。文殊が智徳、証徳を司るのに対して、普賢は理徳、定徳、行徳を司り、また女人成仏を説く法華経に登場することから広く女性の信仰を集めたともいわれている。法華経については内供の鼻が短くなつた後に「法華経の書写の功を積んだ時のやうな、のびのびした気分になつた」とふれられており、「鼻」が「池尾禅珍内供鼻語第二十」を主要な典拠に仰いでいるところからすれば、これは法華経読誦の功徳を多く紹介する『今昔物語』そのものの影響によるものと推察される。

この場面について清水康次は「普賢菩薩の画像は、通常、白象に乗った姿で描かれている。内供は、白象の長い鼻を見つめていたことになる。」とするが、このように考えられた要因の一つとして『近代文学注釈大系 芥川龍之介』における吉田注釈が想定される。吉田は普賢について「普賢—普賢菩薩の略。

仏に仕え、白い象に乗って、右手に金剛杵（きね）、左手に金剛鈴をもち、仏の右側に侍する菩薩で、慈悲をもつて人々を救済する。」としており、管見の限り白象にはじめて言及されたものである。芥川が参照したとされる『校註国文叢書』所収の『今昔物語』（上下巻 博文館 大4）には別の逸話の注として「普賢の白象に乗るは、普賢は禪定を代表するものなるが故に定力の能く諸行を撰取することまさに白象の柔軟しかもよく事に耐ふるが如くなるを表はしたるもの也。」（智証大師互唐伝顯蜜法婦来語第十二）注、「普賢菩薩 文殊と共に釈尊の脇士也、前に委しく注しつ、常に白象にのる菩薩也。」（信誓阿闍梨依経力活父母語第卅七）注）などもあり、吉田注釈もその延長線上に位置付けられよう。清水論でもこの点は基本的に受け入れられ、かつまた他論においてもこれまでに大きな異論は出ていないために、このような見方が長らく小説理解の素地となつてきたと見て差し支えない。

たしかに、国宝普賢菩薩騎象像（東京国立博物館蔵）をはじめてとして、今日一般的に流布している普賢菩薩像は白象に乗っているものが多い。「妙法蓮華経」第二十八「普賢菩薩勸発品」によると、普賢菩薩が行の象徴であるのは道を進む時に何人にも妨げられない象の姿に由来しているのだといい、「仏説観普

「賢菩薩行法経」には象の鼻に赤真珠色の茎をした華があるとも説かれている。そこから内供の長い鼻、あるいは弟子に踏まれた後の赤い鼻を連想することもできるかもしれない。しかし、たとえば木造普賢菩薩立像（長野県大法寺蔵）や石造普賢菩薩立像（中国河南省龍門石窟）なども残されており、騎象像がその全てではないことには留意しておきたい。ことに原典における内供は「身浄くて真言など吉く習て」と密教系の僧侶に仕立てられていて、胎蔵曼荼羅に描かれる普賢などは騎象像一辺倒の見方を留めるに好個の例となる。

もちろん、本文では「専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身」と顕教系の僧侶に変じられており、両者を安易に結び付けることはできない。だが、少なくとも内供が眺めていたのが一体どの普賢の画像であるかを判別できない以上は、本文に明示されている「普賢」から一言もふれられていない「白象」に解釈を移すには特別な理由を必要とするのではないだろうか。もし白象にのみ意味を持たせるのなら、眺める対象はたとえば帝釈天のような騎象した他の仏でも良かったはずであり、その上であえて普賢を対象としたからには何らかの意味付けがあったものと強く推せる。

本文の叙述によれば、内供は「傍にかけた普賢の画像を眺め

ながら、鼻の長かった四五日前の事を憶ひ出すのであり、その願意の対象はあくまで普賢菩薩である。ここでの要点は鼻が短くなった今と長かった昔とが対比されていることで、しかもそれが「さかえたる昔をしのぶがごとく」なされているのだから、そこには過去回帰の願望があらわれていることになるだろう。そうなると、誰にも妨げられずに道を突き進むような白象の心象を移し見ることは必ずしも適切とはいえない。「普賢菩薩歎発品」によると、この普賢菩薩の導きには、(一) 法に基づいて悟った真理が誤りでないことを証明する (二) 真理をどのように当てはめるべきか導く (三) 道を誤り失敗したら取り返す方策を授ける、としたことなど挙げられており、「鼻」における普賢の位置付けとはほぼ一致している点は極めて興味深いことである。

また、芥川が「一人の無名作家」(大15)でもふれていた『平家物語 灌頂巻』「大原御幸」<sup>②</sup>には、後白河法皇が出家した建礼門院徳子を寂光院に訪ねる場面で「中尊の御手には五色の糸をかけられたり。左には普賢の画像、右には善導和尚並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書もをかれたり。」とした描写がある。芥川文学における『平家物語』の影響は「俊寛」(大10)に指摘されて久しいけれど、この「普賢の画像」

に着目すれば「鼻」読解においても有力な手掛かりとなるに違いない。それは、後段の建礼門院の作らしき歌「おもひきやみ山のおくにすまゐりて 雲の月をよそに見むとは」によつて、その昔宮中で楽しく眺めたことと、現在の身の上において眺めていることが対比され、「鼻」同様に過去回帰の願望があらわれているからである。もちろん、内供が思い出すのは「鼻の長かつた四五日前の事」であり、平家没落後の建礼門院の回想とは時間的に大きな開きがある。また、世を捨て出家した身を「いやしくなりさがれる人」と一概にいうこともできないだろう。しかし、これが時間的な対比であることに加えて、他でもない普賢菩薩と月に仮託されてることからすると、後述する月の象徴性とも緊密に関わつているとさえいえる。何より、後白河法皇の訪問を受けた建礼門院は京都東山にある長樂寺で出家しており、この寺こそは弟子の僧が鼻を短くする法を教つた知己の医者が奉仕していた寺である。周知のように、この件は「震旦僧長秀来此朝被任醫師語第十」(『今昔物語』)に拠つたもので、原典では「梵釋寺」とあつたものがわざわざ書き換えられたものだった。

他方、「大原御幸」で「障子には、諸経の要文共、色紙にかいて、所々におされたり。そのなかに大江の定基法師が、清涼

山にして詠じたりけむ、『笙歌遙聞孤雲上、聖衆来迎落日前』ともかゝれたり。」とされた一首は『十訓抄』「第十 才芸を庶幾すべき事」に引かれた歌であり、この逸話では慶滋保胤の作とも伝えられている。定基は保胤のもとで出家し、以後は寂照と称して如意輪寺に居住したとされるが、このことに基づく逸話「内記慶滋保胤出家語第三」は「六の宮の姫君」(大11)にも採られた他、同じ「本朝の部卷第九 本朝附仏法」に「往生絵卷」(大10)の原拠となつた「讃岐国多度郡五位聞法師即出家語第十四」が載せられているところを併せ見ると、この時期の興味の一端を垣間見ることが出来る。また、この歌は『宝物集』でも『十訓抄』と同様の体裁で採られており、『宝物集』の作者こそは鹿ヶ谷の謀議に与して俊寛とともに鬼界ヶ島に流刑された平康頼である。むろん、そのことも「俊寛」には含意されており、これらのことが互いに広く影響しあつているものと考えることが出来る。

話を戻すと、内供は長い鼻によつて傷付けられた自尊心の毀損の回復を狙つて鼻を短くしたものの、そのことでかえつて周囲から笑われた気になつたということである。つまり、笑われまいとして自ら選んだ道が誤り失敗したのであり、そこからの回復、回帰の願望を託されて「普賢の画像」は存在していたの

である。批判的な読みの中では、内供は単に白象の長い鼻を見て「鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出」すという「単なる外見、容貌の問題」として捉えていることになり、「慈悲をもつて人々を救済する」べき普賢は何ら特別な意味を持たない。その結果、物語末部の明るい描写についても、錯覚の中を突き進む内供と同様に「単なる見せかけ」(鳥居)の表れという理解となり、物語は滑稽譚の域を出ることができなくなってしまうわけである。

### 三 普賢菩薩と犬

さて、すでに指摘のあるように、内供が「意外な事実を発見」した後に中童子を怒った逸話は「池尾禪珍内供鼻語第二十」を直接の典拠としている。が、その「怒らせた」契機としてある犬については、「元興寺僧蓮尊持法花経知前世報語第十六」(『今昔物語』の影響が推定される。これは僧蓮尊が「法華経普賢品」(「普賢菩薩勧発品」のこと)を暗誦できないことを嘆き普賢に折請すると、前世であった犬の身を受けてのことだったという筋であり、本文には次のようにある。

一夏既に過ぎぬる間に、蓮尊夢に天童来て蓮尊に告て云く、「我は此れ普賢菩薩の御使也、汝が宿業の因縁を令<sub>レ</sub>知めむが為に來れる也、汝ち前生に狗の身と有りき、母汝と共に人の家の板敷の下に有りき、法花の持者其の板敷の上に有て法花経を誦誦す、初め序品より終り妙莊嚴王品に至るまで廿七品を誦するを狗聞き、(てい)、普賢品に至て汝ち母の起て去しに随て汝も共に去にき、然れば普賢品を不<sub>レ</sub>聞ざりき、汝ち前生に法花経を聞奉りしに依て狗の身を転じて今人の身と生れて、僧と成て法花経を誦誦す、但し普賢品を不<sub>レ</sub>聞ざりしに依て其品を暗に不<sub>レ</sub>思はず

この話は他の『法華験記』出典の話と同様の類型を辿っており、畜生の身であった宿業の因縁によってその理解が中途なものであるという体裁を取っている。

内供は鼻を短く見せるために鏡に向かうと、かえって鼻が長く見えるような気がして、今更のようにため息をついては不承不承に経机へ観音経、すなわち法華経第八卷第二十五「観世音菩薩普門品」を読み帰ることになる。読みに帰るとは、本来読むべき頃合であった、あるいは一度中断していたものを再開することを予期させ、誦誦が完遂されていなかったことを示し

ている。また、鼻が短くなった後に誦しかけた経文をやめて眩くことがあったという部分についても、前後の関係から推して観音経を指していたことは明らかであり、この場合にはより明確に中絶されていたことを意味している。「芋粥」の五位が利仁に敦賀行を告げられるところでも「うる覚えの観音経」を口の中に念じる場面があり、いずれも法華経を対象にした上その行為や理解が中途なものであるという『法華験記』の典型を正しく踏襲しているといえるだろう。

一方、「鼻」の中童子が彪犬を逐いまわす際に手にしたのは、他にもない鼻持ち上げの木だった。「鼻を打たれまい。それを、鼻を打たれまい」とした言葉からは中童子が彪犬を内供に見立てて囃し立てたことがわかるが、「芋粥」でも子供たちが「彪犬の首へ縄をつけて、打つたり殴いたりしてゐる」状況に五位が出くわす場面で、「何ぢや、この鼻赤めが。」といわれた言葉を「自分の顔を打つたやうに」感じており、どちらも犬と強力で結び付けられている。「鼻」では内供の前世に関する因果までは直接言及されていないものの、他の『法華験記』出典の話は概観すると、本朝の部巻第四「僧行範持法花経知前世報語第十四」では黒馬、同「越中国僧海蓮持法花経知前世報語第十五」では蟋蟀、同「金峰山僧転乗持法花知前世語第十七」、

同「備前国盲人知前世持法花語第十九」では毒蛇、同「比叡山東塔僧朝禪誦法花知前世語第廿四」では白馬、同「山城国神奈比寺聖人誦法花知前世報語第廿五」では蚯蚓、と様々であり、やはり犬であることは大きな意味を持つ。

表層的に見れば、内供が腹を立てたのは中童子によって暗に揶揄されたと感じたからに違いない。五位についてもまた、いわなくてもなくともいいことをいって恥をかき、そうした自分が情なくなつたということである。しかし、「犬も打たれ、ば、痛いであろう」とした言葉と合わせ考えれば、どうもそればかりとは見なし難く、こうした情景のうちには単なる感情移入や同情を超えた意味付けがあったという推測が成り立つ。むしろ、内供や五位が犬を見てただちに自らの前世を知り、その宿業から腹を立てたのかどうかまでは作中に定かでない。というより、この段階で彼ら自身にそのことを知る術はない。ただ、「池尾禅珍内供鼻語第二十」から内供のモデルを取り、その上で「普賢の画像」まで眺めさせているのだから、読者の心象の中に法華経持経者の逸話と結びつくことはあらかじめ想定されていたといつて言い過ぎではないだろう。

「杜子春」（大9）では亡母が「瘦せ馬」の姿に変じて登場し、この話の素となつた「震旦ノ隋ノ人、得母成馬泣悲語第十七」

〔今昔物語集〕巻第九の末部にも「此レヲ以テ思フニ、人ノ許ニ有ラム牛・馬・犬・鶏等、皆、前世ノ償フ所有テ来レル也ト疑テ、強ニ呵責ヲ不可加ザル也トナム語り伝ヘタルトヤ。」と宿業の因縁が明らかにされている。こうしたことは先の「内記慶滋保胤出家語第三」にも通じており、この時期における作品の創作や読解にあたって、作者、読者双方の念頭になかったとは考えられないのだ。「池尾禅珍内供鼻語第二十」と同じく「芋粥」の典拠とされる「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七」〔今昔物語〕下巻 本朝の部巻第十六)にも犬の描写は存在しないため、これは後から特別に挿入されたものである。そしてその主意は、やはり普賢との関連だろう。『今昔物語』には同種の逸話として「比叡山横川永慶聖人誦法花知前世(生イ)語第廿一」(同)が収められており、登場する菩薩は普賢ばかりでなく龍樹とされる場合もあるからだ。この話は僧永慶聖人が撰津国箕面の滝に参籠し、龍樹菩薩の夢告により前世が法華持経者の僧房にいた犬であったことを知るといふもので、先の話とほぼ同型である。芥川は「鼻」を発表するよりも前に、龍樹の出家の伝承をもとにした戯曲「青年と死と」(大3、『今昔物語集』巻第四「龍樹、俗ノ時、作隱形薬語第廿四」に依拠か)を記しているが、「鼻」において龍樹は人並みの鼻を備え

た菩薩として紹介されるに留まり、願意の対象とはなっていない。だから、白象はおろか犬そのものに意味があったというよりは、やはり普賢にこそ特別な意味が課せられていたと見てよさそうである。

#### 四 まばゆく光る九輪の象徴性

ところで、「鼻」読解における最大の課題は、短くなった内供の鼻が一夜にして元の長い鼻へと戻ることである。原典では内供の鼻が「亦二三日に成ぬれば、(略)本の如くに腫て大きに成りぬ」と自然に元に戻る体裁となっていたものが、小説本文では「或夜」に「日が暮れてから急に風が出た」ことで寝付かれず、「ふと鼻が何時になく、むづ痒いのにな気がついた」後に元の姿に戻るようになる。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が、一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせいであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禅智内供は、葦を上げた椽に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覚が、再内供に帰つて来たのはこの時である。

内供は慌て、鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。

内供はこの間に何かを試みたわけではなく、これを自然な変化と取ることもできる。ただ、短くした鼻が長く戻るその契機に原典にない記述があることからすれば、そこに何らか重要な意味が込められていることに今さらながら気づかされるのである。

寺内にある銀杏や橡は季節的には秋の植物であり、どちらも晩秋を示す季語として古くから用いられてきた。それらが紅葉して変色し、一夜にして散つたせいでこのような描写になるのだと思われるけれども、「黄金」色と表現されることでそれまでとは異なつた神々しさを醸し出している。一説には銀杏は仏教とともに伝来し、中国で寺院の開基された場所に自生していたことから日本でも多く寺院に植えられたという。また、日蓮宗との関連でいえば、先祖への報恩の重要性を説いた「泣き銀

杏」という逸話が残されており、作者の中で特別な響きを持っていた可能性も十分にあるだろう。「追憶」(大15)には「僕は幼稚園へ通ひだした。幼稚園は名高い回向院の隣の江東小学校の付属である。この幼稚園の庭の隅には大きい銀杏が一本あつた。」(一七 幼稚園)とした記述もあり、幼少期の印象として芥川の脳裏に残つていたと考えることもできる。

そして、より大切だと思ふのは塔と九輪で、塔といえば「妙法蓮華経」に「見宝塔品第十一」という一節がある。これは多宝如来の塔が地から湧き出し、法華経を真実であると説いたものであり、宝塔は全ての人間に具わる仏性を、そしてこれを見ることはその仏性を発見することなのだという。そうなれば、物語の末部の解釈は内供をどのように位置付けるかということと同時に、読者自身にとつての仏性のあり方を問うものともなり得よう。「傍観者の利己主義」に連なる重要な問題性と思われるが、詳しくは次稿に譲らねばならない。

一方の九輪は別名を相輪といい、宝珠、竜車、水煙、宝輪、請花、伏鉢、露盤などから成る。宗派や經典によつても意味付けは様々あるが、密教で九輪は五大如来(大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就仏)と四大菩薩(普賢菩薩、文殊菩薩、観音菩薩、弥勒菩薩)を表しており、ここでも普賢

菩薩には特に注意を払っておきたい。もちろん、九輪が光っているのだから普賢にのみ焦点化されているわけではないけれど、上述のことからすると、これを単なる心象風景と片付けることはできない。「普賢の画像」を「さかえたる昔をしのぶがごとく」眺める内供が、中童子に追われる犬を見て腹を立てる。その上で普賢を象徴する九輪が光るのだから、そこに内的な必然性を見出すことは容易に、そして確実になうことだろう。

少なくとも、そうした思考の形跡は「白」（大12）にも認めることができる。「白」では犬の白が黒い体に変わった時、白く戻った時のそれぞれに周囲から驚かれる場面がくり返され、「或秋の真夜中」に元の状態に戻るなど多くの点で「鼻」と共通している。さらに興味深いことには、元の姿に戻る契機が密教の基本的な観法の一つである月輪観に通じており、この月こそは普賢菩薩の象徴性をより色濃く示している。「菩提心論」によると、普賢の大菩提心はあたかも満月の光が何ものも区別しないことと同様で、円明で清らかな心性が鏡のように万象を映して自己の根底をなしている。しかも、禪定に入るのは澄み切った「秋の夜空」に輝く月のように清らかな満月輪の中であり、それゆえ月輪は人々が本来具有する清らかな菩提心、つまり悟りの心を表しているのである。したがって、犬の白が贖罪

する時に月に祈願すること、あるいは内供の頭上で九輪がまばゆく光ったことは、いずれも超自然的な存在のあらわれ、すなわち普賢菩薩の現前ということがができる。

一点重要なことは、この月輪の本質、換言すれば仏による救済は、衆生が知らないでいたとしても厳然と実在すると考えられることである。たとえば、「蜘蛛の糸」における健陀多は遠い天上から銀色の蜘蛛の糸が垂れてくるのを見て喜んだには違いない。ただ、それが地獄から抜け出るための手立てとなると直感したとしても、極楽へ入るための手立て、つまり仏の救いであったとまで理解していたかは疑わしい。それは、原典とされる「因果の小車」（明31）で「一縷の光」を前に「大慈大悲の御仏よ」と健陀多が叫んでいた部分が捨象され、思わず手を拍って喜ぶという描写に留められたためである。これについて前出三好は、「かほそい糸は、人間の〈信心の一念〉にほかならず、だから〈無辺の衆生〉をことごとく〈正道の本地〉にはこぶ大乘の力をそなえていた。蜘蛛の糸の断滅はそれ自体が、救済の在ることの明証である。」と述べていた。「大乘の力」とは単なる悟りへの到達のみならず、衆生の救済が含まれるために健陀多のような男でも救済の対象となる。小さな蜘蛛の命を助けた行為がこの男の信心からくるものでなかったことは明らか

かであり、それは己ばかりが助かりたいとする利己的な考えで他の罪人を落とそうとしたことにも連なっている。しかし、だからといってそれが救済の対象とならないということではむろんない。たとえば、蜘蛛の糸が切れたことが大乘の心を持ち得なかったことに起因していたとしても、仏による救済は満月の光のごとく何ももの區別することがないのであり、蜘蛛の糸は犍陀多の上にも垂れてくるのである。

自らの外見に一喜一憂する内供に対し、批判的な意見がある。だが、「蜘蛛の糸」がそうであったように、まばゆく光る九輪もまたそれ自体が仏による救済が在ることの明証なのであり、その言動が法慳貪の罪を受けるに値しよう、内供の上に九輪はまばゆく光るのだ。誤解を恐れずにいえば、犬の白が月に祈願し、体が元に戻る奇跡を我々の多くは何の疑いもなく受け入れている。そしてそれは、この話が童話であることや明るい結末を迎えることとは直接的には関係がない。それはいわば読者が月と超自然的な存在との見えない糸を感じていることに由来し、それこそが物語の象徴性を支えているのである。同様に、内供の鼻が元に戻るといふ奇怪な出来事自体を受け入れることができるのは、原典の存在もさることながら、九輪がまばゆく光ること何らかの超自然的存在を感じているからに他ならな

い。そして、もし「鼻」に明るい結末を感じさせるものがあるとするれば、それは翌朝以降の描写に単に明るい印象が付与されていることばかりでなく、このような前後関係が想定されるからなのである。もちろん、その意味は個々に現象し、時代や文化的背景によっても変わってくるだろう。ただ、いずれにしろ「愛すべき内供」について考えをめぐらせる時、あるいは「かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。」とした詠嘆とその後の顛末を考える時、ながめていた「普賢の画像」やまばゆく光る九輪の位置付けを明らかにすることは、物語内容へ接近するほどんど不可欠な方法なのである。

### まとめ

見てきたように、芥川の小説「鼻」は従来指摘されてきた「羅生門」や「芋粥」ばかりでなく、「蜘蛛の糸」「杜子春」「白」などの作品とも共通するモチーフが認められる。物語末部の内供の詠嘆は「自尊心」と「傍観者の利己主義」とによって相対化されている、とした見方に従えば、「鼻」は錯覚に基づく滑稽譚となるのかもしれない。しかし、わが身の辛苦からの解放を仏菩薩に祈願するという構図は「蜘蛛の糸」に通じ、内供の

祈念が元の姿に戻る奇跡を実現する話と読めば「白」と同様である。長い鼻を笑われた高僧が、単なる外見の問題にすぎない苦悩を周囲に知られまいとして短くする。その結果かえって笑われた気になり、元の姿に戻ったことで「かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。」と思う。このような作品の結構だけからすれば、「翌朝」以降の寺内の明るい描写などは全くの不要、そもそもこれがただの滑稽譚であれば「明るい」描写を見せかける必要すらないことになる。だが、「蜘蛛の糸」がそうであったように、まばゆく光る九輪はそれ自体が仏、より具体的には普賢菩薩による救済が在ることの証なのであり、「普賢の画像」や犬の描写はそのことを示す重要な鍵なのであった。そして、このような救済のモチーフがあることを前提にした上で、結果として内供が救われのかどうかを読み込んでいくことこそ、小説としての「鼻」を吟味することにつながるのではないか。

最後にもう一つだけふれておきたいのは、以上述べてきたような思考の根源がおそらくは作家の出自に求めることができることである。先にもふれた胎藏曼荼羅は全部で十二の区画に分かれているが、その中心である中台八葉院では赤い八葉蓮華の中に大日如来、その四方に宝幢如来、開敷華王如来、阿弥陀如

来、天鼓雷音如来の四仏と、その四隅に普賢菩薩、文殊菩薩、観音菩薩、弥勒菩薩の四菩薩が配されている。ここから普賢菩薩は東南の方角、干支でいえば辰年・巳年の守り本尊と考えられるようになったといひ、辰年辰月辰日に生まれたことで名付けられたとされる芥川にとつては特別な存在でもあっただろうからである。

そればかりではない。芥川が幼少期に過ごした本所深川には「押上の普賢さま」で知られる春慶寺があり、こうしたことは生活感の中でも実感されていたに違いない。長養山春慶寺は芥川の菩提寺である慈眼寺と同じ身延山久遠寺末の寺院で、現在では「鬼平犯科帳」に出てくる岸井左馬之助の寄宿先としてのイメージが強い。江戸期に成った『新編武蔵風土記稿』には真如院日理による開山であること、当初浅草森田町にあったものが寛文七年に移ったこと、霊夢を見た百済国聖明王によつて刻された二寸八分の普賢菩薩像が祀られ「開運の普賢」と号することなどが記されており、明治期に刊行された『東京名所図会』<sup>5)</sup>でも「推古天皇の朝百済の僧観勒の携へ来れる普賢像（長二寸八分）を安置す。號して開運の普賢といふ。」と同様の記述が見られる。しかも、この像は木造の立像（現墨田区有形文化財）ということであるから、「普賢の画像」から白象へ解釈

を移すことの難しさをさらに強く印象付ける。残念ながら芥川がこの寺を直接詣でた記録は確認できていないけれど、同書で「堂畔に狂言作者鶴翁南北の塚あり。」とされる鶴屋南北については小説「妖婆」(大8)の中でもふれており、これらのことが全く理解の外にあったと想像することは難しい。「鼻」同様に作品の評価については分かれているものの、作中に「超自然的な現象」に言及されている点は見逃せないところであり、「東海道四谷怪談」などと合わせた包括的な論及を今後の課題としたい。

短くなった鼻が一夜にして元の長い鼻に戻るといふ出来事は、月と超自然的な存在との見えない糸が一体何であったかを如実に物語る。芥川が『今昔物語』や『平家物語』をはじめとする古典群や日本神話を好み、数々の作品に投影して来たことを思えば、そうした知識は生活感の中で有機的に結びついていたのだといえる。そしてまた「龍之介」という名付けの由来でもある普賢は、文字通り諸願成就の象徴としてあったのではなかっただろうか。

## 註

- (1) 今日もつとも入手しやすいものの一つである日本古典文学大系『今昔物語集』(岩波書店 昭35)では巻第二十九だが、芥川が参照したとされる『校註国文叢書』所収『今昔物語』(上下巻 博文館 大4)では下巻の本朝の部巻第十八にあり、以下はこれに従う。なお、それ以外の引用についても同様とし、博文館版に所収されていないものについては前者に準拠することとする。
- (2) 吉田精一「作品解題『鼻』」(近代文学注釈大系 芥川龍之介) 有精堂 昭38
- (3) 三好行雄「負け犬——『芋粥』の構造——」(芥川龍之介論) 筑摩書房 昭51
- (4) 駒尺喜美「芥川龍之介の世界」(法政大学出版局 昭47)
- (5) 鳥居邦朗「芥川龍之介『鼻』」(国文学 解釈と鑑賞) 至文堂 昭45
- (6) 関口安義「芥川龍之介 実像と虚像」洋々社 昭63
- (7) 平岡敏夫「芥川龍之介 抒情の美学」(大修館書店 昭57)
- (8) 石割透「芥川龍之介——初期作品の展開」(有精堂出版 昭60)
- (9) 山崎甲一「芥川龍之介『鼻』の文体について」(鶴見大学紀要) 第二十三号 昭61、のち『芥川龍之介の言語空間——君看雙眼色』笠間書院 平成11
- (10) 田中実「『鼻』と『龍』」(都留文科大学研究紀要) 第40集 平6
- (11) 清水康次「『鼻』・『芋粥』論——『解釈』という方法にふれて——」(京大文学紀要「国語国文」 昭57、のち『芥川文学の方法と世界』和泉書房 平6)
- (12) 『日本古典文学大系33 平家物語 下』(岩波書店 昭34)
- (13) 『弘法大師空海全集 第八巻』(筑摩書房 昭60)
- (14) 三好行雄「(御伽話)の世界で」(日本児童文学大系 第十二巻 秋田雨雀・武者小路実篤・芥川龍之介・佐藤春夫・吉田慈二郎集) ぼる

(15) 出版 昭 52、のち『鷗外と漱石 明治のエアトス』力富書房 昭  
58) 中野了随『東京名所図会』(小川尚栄堂 明 23)